



PTSD(心的外傷後ストレス障害)は、生命の脅かされる事象(トラウマ)を体験することによって、日常生活に支障をきたす状態です。  
その特徴は、①フラッシュバックと呼ばれるトラウマの心理



● 徳島大大学院 二宮 恒夫教授 ●

## トラウマ体験でPTSDに

自分が悪かったのではないかと思う罪悪感や無力感、退行、分離不安、吐き気、めまい、頭痛、腹痛、頻尿、夜尿、唸音、過呼吸などの心身症状があらわれます。

対応は、退行や分離不安、心身症状を受け入れて、子どもに安心感、安全感を与えます。一緒に絵を描いたり、遊びを通したりラックス会話によって、子どもがトラウマを表現しやすい場を整えます。

的な再体験のトラウマの場面や、それを引き起こす状況の回避と、苦痛を避けるための無感情のまひ反応の集中困難、特定刺激への過剰反応など過覚醒(過緊張)の三つの症状です。

子どもによく見られる症状は、①興奮、過度の不安状態、人が変わったようになる、現実感にないことを言う、恐い夢を繰り返すなどのフラッシュバックの症状の表情に乏しい、話をしない、引きこもるなどの無感情の症状のおひえ、過敏反応、落ち着かない、学業困難など過緊張の症状です。その他に、

自分が悪かったのではないかと思う罪悪感や無力感、退行、分離不安、吐き気、めまい、頭痛、腹痛、頻尿、夜尿、唸音、過呼吸などの心身症状があらわれます。対応は、退行や分離不安、心身症状を受け入れて、子どもに安心感、安全感を与えます。一緒に絵を描いたり、遊びを通したりラックス会話によって、子どもがトラウマを表現しやすい場を整えます。

トラウマ体験になることは、地震などの天災、交通事故の他に、子どもの虐待があります。虐待には身体的虐待の他に、ネグレクト(養育の怠慢)、言葉による脅迫、無視やDV(ドメスティックバイオレンス)の目撃などの心理的虐待、性的虐待があります。虐待された後はPTSDの症状が複雑化し、感情の抑制と暴発、多重な人格、将来への絶望、加害行為(虐待を受けて育ち大人になって虐待をするもの)の二つの生じることがあります。

過保護、過干渉、過剰期待、厳格、放任など子どもの意思が尊重されない親子関係は、日常に潜む気づかれない虐待といえます。また、学校での体罰、いじめなどもPTSDを起こす要因になります。これら、人が原因のPTSDは絶対になくさせられはなりません。